

深夜のオフィスは、不気味なほど静まり返っていた。

高い天井から吊るされた照明が、デスクの上に置かれた書類を白く照らしている。

目の前に座る男——債権者のボスは、脚を組み替え、気だるそうに煙草を燻らせていた。

その冷徹な視線が、私の全身をなめるように動く。

（どうして、こんなことになっちゃったんだろう）

親が遺した、天文学的な額の借金。

真面目に働けば、返すのに一生かかっても足りない。

責任感から逃げ出せなかった私が、今、崖っぷちに立たされている。

「……で？ 答えは出たんか」

低い、けれど耳に心地よく響く関西弁が、静寂を切り裂いた。

私は震える唇を噛み締めて、俯いたまま声を絞り出す。

「……無理、です。こんな大金、どうやって返せばいいのか……」  
視界が涙で滲む。

この男に、泣きついて許してもらうなんて、そんな甘い話があるはずがない。

ボスの唇が、嘲笑うように歪んだ。

「無理やな。まあ、そうやろな。お前の年収やったら端数すら返せへんわ」

彼は煙草を灰皿に押し付け、ゆっくりと身を乗り出した。

高級な香水の香りと、微かな煙草の匂いが鼻腔を突く。

「選択肢は二つや。風俗に売られて、くっさい男共に抱かれるか。それとも、俺の女になって、俺に飼われるか」

頭が真っ白になった。

風俗なんて、想像しただけで吐き気がする。

けれど、この冷酷な男に心も体も支配されるのも絶対に嫌だった。

「そんなの、どっちも無理よ……!」

たまらず叫んだ。

私は誰の所有物でもない。自分の人生は、自分で責任を持つ。そう信じて必死に生きてきたのに。

けれど、私の拒絶を男は鼻で笑った。

「嫌？ お前に拒否権があると思ってるんか。借金は、お前がどこに逃げようと消えへんぞ」

彼は立ち上がり、ゆっくりとデスクを回り込んで私に近づいてくる。

一歩、一歩、距離を詰められるごとに後退していくと、ついに背中が、冷たい壁に当たった。

至近距離で彼に見下ろされ、どこにも逃げられないという恐怖が全身を支配する。

「嫌な気持ちはわかるで？今まで苦勞も知らずに生きてきたもんなあ？でもなあ……俺はそのプライドが粉々に碎ける瞬間が、一番好きやねん」

彼の大きな手が、私の肩に置かれた。

指先が、薄いブラウスの生地越しに肌をなぞる。

ゾクリと背筋に悪寒が走った。

「あ、……やめて……」

拒絶の言葉が、弱々しく空氣に消える。

震える肩に置かれた手のひらから、逃げ場のない圧迫感が伝わってくる。

私は自分の人生の主導権を、今この瞬間、完全に失ったのだと思い知らされた。

今まで築き上げてきた自立心、真面目に生きてきたという自負。その

すべてが、この男の指先一つで簡単に壊されてしまう。その事実には、恐怖と共に、言いようのない絶望が押し寄せた。

「やめて？ お前が選ばなあかんのは、どっちの地獄に行くかや」

彼の声は残酷に、けれど甘く耳朵を打つ。

逃げ出したい。けれど、足がすくんで動かない。

「ほな、はじめよか」

彼はそう言うと、迷いのない手つきで私のブラウスのボタンに手をかけた。

一つ、また一つと、ボタンが外されていく。

肩からブラウスが滑り落ち、冷たい夜の空気が肌を刺す。

「やっ、やめ……っ！」

慌てて胸元を隠そうとしたが、その手首を強い力で掴まれ、壁に押し付けられた。

逃げられない。

拘束された腕が、激しく震えている。

抗う術もなく晒される肌が、屈辱で熱く焼けるようだった。

「まずは、どれだけ使えるか試させてもらおうやないか」

男の声には、一切の迷いがなかった。

スカートのジッパーが下ろされ、下着姿にされるまで、わずか数秒だった。

夜の豪華なオフィスで、裸に近い状態にされ、私は自分がどれほど無力であるかを突きつけられた。

目の前の男は、私の人生を、肉体を、すべて握りつぶせる絶対的な支配者だということに、嫌でも気付かされる。

壁に押し付けられ、下着姿で震える私を、男は不躰な視線で品定めしている。

屈辱で顔に熱が上ってくるのがわかり、咄嗟に下を向く。

平凡ながらも、真面目に生きてきたはずなのに。その結果が、こんな深夜のオフィスで、男に裸にされて見られることなんて。

涙が溢れそうになるのを必死にこらえ、私は唇を噛み締めた。

「おい、こっち向けや」

低い声に促され、私は渋々、顔を上げる。

彼は満足そうに口角を上げると、私を抱き上げ、そのまま広いデスクの上に乱暴に座らせた。

冷たいデスクの天板が、太ももの裏に当たってビクッと身体が跳ねる。

「あ、……っ」

彼の手が、私の膝に添えられた。

そのまま、ゆっくりと、けれど拒絶を許さない力で、私の脚を左右に押し広げた。

そうやってM字に開かされた股の間——薄いショーツ一枚で、一番恥ずかしい場所が、彼の視線の真正面に晒されている。

心臓が激しく脈打ち、耳の奥でその鼓動がうるさく響く。

「み、見ないで……っ」

慌てて脚を閉じようとしたが、彼の手がそれを許してくれなかった。ショーツのクロッチ部分が、指で強引に横にずらされた。

「ひっ」と、乾いた音が喉から漏れ出る。

「へえ……ここ、可愛い色してんなあ。自分処女なん？」

男の視線が、私の秘部をじつくりと捉えている。

誰にも触れさせたことのない、ある意味聖域とも言える場所を、こんな残酷に暴かれるなんて。

絶望と羞恥心で頭がどうにかなりそうだった。

そのまま、どういうわけか男の顔がどんどんと剥き出しの秘部に近づ



いてくる。

そして——熱い吐息が、剥き出しになった粘膜に直接かかり、ゾクリと身体が震えた。

「……っ、な、なにを……」

止める間もなく、熱くて湿った感触が、私のクリトリスをダイレクトに舐め上げた。

「ひゃ……♡」

突然のことに、私の身体は大きく跳ねる。

それに気をよくしたように、男はピンと張った小さな突起を、下から上へ、ねつとりと舐め回してくる。

ヌチュ……ヌチュ……デュッ♡

「……んっ♡」

不意に強く吸い上げられて、また反射的に背中が弓なりに反る。

(……気持ち悪い！)

そう頭の中では拒絶しているのに、敏感な場所を刺激されると、どうしようもなく身体が反応してしまう。

脳が快感に塗り替えられていく恐怖。

男はそんな私の反応を楽しんでいるのが分かった。

「ほう、ええ反応やな。身体は正直やんけ」

ジュルル……♡チュパッ♡♡

執拗に、何度も、同じ場所を吸い上げられる。

舌先でコリコリと弄られ、唾液でぐしょぐしょに濡らされる音だけが、静かなオフィスに響いた。

レロレロォ……ヌルヌル……♡♡

「や、やめ……ん……っ♡」

拒絶の言葉とは裏腹に、声が上ずって、甘ったるい声が口から漏れ出

てしまう。

(……だめよ。こんな男の……舌で……)

自分の声が、自分のものではないように聞こえた。

快感に屈して、こんな情けない声を出すなんて。

「やめてえ言うわりに、自分のここ、もうこんなに濡れてんで」

「そんな……」

「んー……処女まんこ、うまいわぁ……」

彼の手が、私の腰をがっしりと掴み、さらに深く、舌を潜り込ませた。同時に、中指が、ぐちゅりと湿った入り口へと突き立てられる。

指が、ぬるりと内奥に侵食してくる。

狭い壁が、無理やりこじ開けられる異物感。

誰にも触れさせたことのない場所を、こんな風に強引に暴かれるなんて。

（もう、これ以上は……っ！）

屈辱が沸点を超え、私は全力で彼の手を振り払おうと暴れた。

「離して！ 触らないでよ……っ！！」

デスクの上に広げられた脚を、無理やり閉じようと激しくもがく。

けれど、男は全く動じない。むしろ、私の激しい抵抗に、愉悅に満ちた笑いをもらした。

「ははっ、ええな。その抵抗、もっとせえや」

彼は私の両手首を片手でまとめて掴み、頭の上に押し付けた。

完全に拘束され、逃げ場を失う。

「俺、抵抗してる女犯すんめっちゃ好きやねん。お前みたいに必死な顔して、身体だけは蕩けてんのが一番ええ」

「ふざけないで！ あなたに抱かれないなんて、一ミリも思っていないわ  
！！」

叫んだ直後、ぐちゅつ、と——中に入っていた指が、唐突に、内壁の弱点をえぐった。

「あっ♡♡」

鋭い快感が全身を突き抜け、情けない喘ぎが口から飛び出した。

彼はニヤリと笑うと、指の動きをさらに激しくさせ、執拗に弱いところを擦り上げる。

グチュグチュ……ぬっちゅぬっちゅ……♡♡♡

「ひゃ、んっ♡や、やだっ♡やめ……っ♡♡」

さっきまで暴れていたはずなのに、指の刺激に身体が翻弄され、勝手に快感に身を委ねそうになる。

（こんなの……最悪よ……）

そう思うのに、中をかき回されるたびに、身体の奥がキュウと締め付けられる。

濡れすぎた粘膜が、指の動きに合わせて卑猥な音を立てた。

クチュクチュクチュクチュクチュクチュクチュクチュク♡♡

「……………ッッッ♡♡」

「声我慢せんと、もっと鳴けや」

彼はわざと指を曲げ、中にある一番敏感な弱点に爪先を立てるようにして、ぐりっと抉り上げた。

「あぁっ♡♡♡」

脳が痺れるほどの快感が、内側から爆ぜる。

抵抗したいのに、指が動くたびに水音がぐちゅりと響き、腰が勝手に跳ねて、さらに深く抉られるように彼の指を迎え入れてしまう。

逃げ場のない絶望の中にありながら、初めて与えられる快感に、身体の奥が熱く疼いて仕方がなかった。そんな自分のはしたない現状にポロポロと涙がこぼれ落ちる。

(ダメよ……こんなの、感じちゃ……っ♡)

頭では拒絶しながらも、快楽に翻弄されて涙を流す姿が、男をさらに昂ぶらせているのが分かった。

彼の呼吸が荒くなり、私を抑え込む腕に力がこもる。

男は再び顔を近づけ、私の秘部へとねっとり舌を這わせた。

同時に、中に入っている指が、さらに激しく、容赦なく内壁をかき回し始めた。

グチュグチュグチュグチュ♡♡グリグリィィ♡♡♡

「あ、あぁっ♡♡い、やぁ……！！♡♡♡♡」

上からは熱い舌がクリトリスを強引に吸い上げ、中からは指が激しく抉り上げる。

二方向からの容赦ない攻めに、意識が混濁し、快感の逃がし方が分からなくなっていく。

「処女まんこ、最高やな。こんなに締め付けて……俺の指、離したくないんやろ？」

煽るような低い声が耳に届く。反論する余裕なんてないくらいの激しい責め立てに、私はただただ喘ぐことしかできない。

自分の意志とは無関係に、身体がこの蹂躪を心地よいと感じ始めている。その屈辱が、快感をさらに鋭くさせた。

ヌチュ……クチュウツ♡♡♡レロレロオッ♡♡

「……お♡や、あ、ん……♡♡」

舌がコリコリと突起を弄るたびに、頭の中に白い火花が散る。

指がぐりぐりと内側を擦り上げるたびに、腰の奥がジリジリと痺れ、限界まで張り詰めていく。

「あ、ああ……♡♡♡ひい……ま、待ってえ……っ♡♡♡」

口では待てと言いながら、身体はさらなる快感を求めて、絶え間なく



トロトロと蜜を垂れ流した。

屈辱的なのに、もっと、もっと激しくしてほしいと身体が疼き、腰をゆらゆらと揺らしてしまう。

(こんなの、だめなのに……っ♡)

その瞬間、男の攻めが一段と激しさを増した。

中に入った指が、内壁を強く、深く、最奥まで突き刺し、そこを容赦なく掻き回す。

同時に、吸い上げられていたクリトリスを、鋭い舌先で弾くように、高速でチロチロと弄り上げた。

「ひぎいっ！？♡♡♡」

内側からの強烈な圧迫と、外側からの高速な舌技による強烈な刺激。二つの快楽が一点に集約され、激しい衝撃が全身を駆け抜ける。

「あ、や、んあぁあゝゝゝっ！！♡♡♡」

身体が弓なりに跳ね上がり、押さえつけられた太ももがガタガタと震える。

ぽたぽたと、大量の愛液がデスクの上に溢れ出した。

激しい痙攣がしばらく続き、やがて私は、力なくデスクの上に崩れ落ちた。

肩で息をつき、涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにした私を、男は勝ち誇ったような笑みで見下ろしていた。

対する私は、指先一つ動かせない。

デスクの上に投げ出された身体は、情けないほどに震え、呼吸が乱れたままだ。

涙で濡れた頬が冷たい天板に押し付けられ、視界はぼやけて、ただ自分の無様な姿を彼に晒している。

そんな私を、男は至近距離から愉悅に満ちた目で見つめていた。

「……はあ、はあ……っ」

「どうや。初めての快感は。最高やったやろ？」

私は屈辱に顔を歪め、弱々しく首を振った。

（こんなの……こいつに無理やり……っ）

けれど、まだ内側が熱を帯びて、触れられた場所がじりじりと疼いている。拒絶のしぐささえ、今の私には空虚な強がりにならなかった。男がそんな私の反応を見逃すはずもなく、耳元で低く囁く。

「派手にイっというて嘘つきやなあ。正直に言いいや。処女やのに気持ちよくしてもらってどうもありがとうございますって、なあ？」

恥ずかしさと悔しさで、視界がさらに滲む。

「……ちが……っ。こんなの……っ！」

涙でぐしょぐしょの顔で、精一杯の否定を口にする。

けれど、じわじわと疼き続ける内壁が、裏腹に快楽を求めてキュウと

締め付けられた。

男は私の身体の反応をじっくりと見極めると、鼻で笑った。

「口ではどないでも言えるもんなあ……なら、もう一回身体に聞こか」  
彼はそう言うと、デスクの引き出しをゆっくりと開けた。

ガサリ、という不穏な音が静かなオフィスに響く。

彼が取り出したのは、シリコン製の、不気味にうねった形状のバイブレーターだった。

鈍い光を放つその物体を見た瞬間、私の背筋に戦慄が走った。

「な、なに……それ……っ」

「お前の身体、ええ反応するからな。次はこれで、どこまで行けるか試してみよう思ってな」

彼は冷酷な笑みを浮かべると、バイブレーターのスイッチを入れた。  
ブウウウウン……という、低く、けれど力強い振動音が静かなオフィ

スに鳴り響く。

その音が、今の私には逃げ場のない宣告のように聞こえた。

「や、やめて……もう、ほんとに……っ！」

私はデスクの上で必死に腰を引こうとしたが、彼は大きな手で私の腰をガッシリと固定し、逃げ道を塞いだ。

「無理？ まだ始まったばかりやん。お前の借金、これで少しは減ったらええなあ？」

彼は嘲笑いながら、振動し続ける先端を、ぐしよぐしよに濡れた秘部へとゆっくりと近づけてきた。

空気が震えているのがわかる。そして――

ブウウウウンツという激しい振動と共に、硬いシリコンの塊が、私の最も敏感な部分に触れる。

「ほおっ！？♡♡♡」

指とは比較にならない、機械的な高速振動が、粘膜を直接、激しく揺さぶる。

脳を直接かき回されるような衝撃に、私は再び身体を大きく跳ね上げた。

「あっ、あぁっ♡♡やだっ、これ、やぁだぁあゝゝ……ッッ！！♡♡」

あまりに強烈な刺激に、思考が瞬時に真っ白になる。

彼は私の反応を楽しみながら、クリトリスの包皮を指でめくり、剥き出しの突起にバイブレーターをさらに深く、押し付けた。

ブウウウウウンッ！！♡♡♡

「ひぎいいっ！？♡♡♡あっ、あぁあっ！！♡♡♡♡♡」

一点に集中した超高速の振動。

剥き出しになった最も敏感な部分が、機械の暴力的な震えにさらされ、

火花が散るような快感が脳を突き抜けた。

指で弄られていた時とは次元が違う。

絶え間なく、容赦なく与えられる暴力的なまでの快感に、デスクの上でガクガクと痙攣してしまう。

「ほおら、身体は正直やな。生まれたての子鹿より震えてんで」

男の低い声が聞こえるが、もう意味を理解することすら難しい。

ただ、この機械にめちゃくちやにされる快感だけがすべてだった。

「あ、あ……お、あぁっ♡♡い、いぐっ、また、いっちやううっ！

！♡♡♡」

限界まで張り詰めた快感の糸が、ぷつりと切れた。

全身を駆け上がる強烈な衝撃に、視界が真っ白に染まり、身体がぐんつと弓なりに反り返る。

「あぁあぁ~~~~ッッッ！！♡♡♡♡♡」